慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	J.S.ミルにおける個性について
Sub Title	J. S. Mill's concept of individuality
Author	水野, 俊誠(Mizuno, Toshinari)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2013
Jtitle	エティカ (Ethica). Vol.6, (2013.) ,p.73- 90
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20130000-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

J.S.ミルにおける個性について

水 野 俊 誠

はじめに

『自由論』において、個性は幸福の主要な要素であるとミル（John Stuart Mill）は述べている。それゆえ、個性の概念は、ミルにとってきわめて重要なものである。それにもかかわらず、個性の概念はかならずしも明確であるとはいえない、と幾人かの注釈者たちは述べてきた[1]。そこで、本稿では、ミルのいう個性の概念をできるかぎり明確にすることにしたい。

第一節　自己の本性の表現として個性

ミルは、『自由論』第 3 章第 1 段落で次のように述べている。

> 要するに、第一義的に他人に関係しない事柄においては、個性が自己を主張することが望ましい。その人自身の性格ではなく他の人々の伝統や習慣が行為の規則となっているところでは、人間の幸福の主要な構成要素の一つであり、かつ個人的社会的な進歩の第一の構成要素をなすものが、欠けていることになる（CW18.261）［強調は引用者］。

ミルは、第一義的に他人に関係しない事柄においては、個性を発揮することが望ましいと述べている。そして彼は、個性を性格と言い換えたうえで、それらが人間の幸福の主要な構成要素の一つであると述べている。

また、ミルは、個性について『自由論』第 3 章で詳しく述べているが、そこでも個性は、性格を持つことと規定されている。性格を持つとはどういうことか。それについてミルは、同書第 3 章第 5 段落で次のように述べている。

> 欲求と衝動が自分自身のものである人、欲求と衝動が、自分自身の育成によって発達させられ、変化させられてきた自分自身の本性の表現になっている人は、性格を持つといわれる。蒸気機関が性格を持たないのと同じように、欲求と衝動が自分自身のものでない人は性格を持たない。もし、彼の衝動が自分自身のものであるだけでなく、強いものであり、強い意志の支配下にあるならば、彼は精力的な性格を持つ。欲求と衝動に関する個性が発達するのを奨励すべきでないと考える人は皆、次のことを主張しなければならない。すなわち、社会は強い本性を必要としてはいない――社会は豊かな性格を持つ人々が大勢いることによってそれだけ善くなることはない――のだし、また精力の一般的な平均が高いことは望ましくないのだ、と（CW18.264）［強調は引用者］。

性格を持つ人とは、欲求と衝動が自分自身のものである人、すなわち欲求と衝動が、自分自身の本性の表現になっている人である、とミルは述べている。そして、ミルはここでも「個性」という言葉を、欲求と衝動が自己のものであることを示す「性格」という言葉と同じ意味で用いている。このように、個性を持つということは、欲求と衝動が自己の本性を表現しているということを意味している。くわえて、ミルは、上に見た『自由論』第 3 章第 5 段落の一節で、自己の本性とは、「自分自身の育成によって発達させられ変化させられてきた」ものであると明言している。したがって、自己の本性とは、自分自身が育成して発達させてきた自己の現在の性格のことであると考えられる。

欲求と衝動が自己の現在の性格の表現になっているということは、具体的には何を意味しているのだろうか。何かが自己の性格の表現になっているということは、それが自己の性格に適合しているということであろう。ところでミルは、何が自己の性格に適合しているのかという問いを、私が何を好むのかという問い、および、何が自己の最善の部分を発達させるのかという問いで言い換えている（CW18.264）。それゆえ、欲求と衝動が自己の性格に適合しているということは、自分が真に望んでいるものが自己の最善の部分を発達させるということを意味している。

欲求と衝動が自己の現在の性格の表現になっているということが、何を意味しているのかを知るさらなる手掛かりになるのは、『自由論』第 3 章第 5 段落の以下の一節である。

> 人々は、自らの理解力を使用することが望ましいということ、そしてまた知性を用いて習慣に従うこと、あるいはときには知性を用いて習慣から逸脱することさえ、盲目的にただ機械的に習慣に従うことよりも善いということは、おそらく認められている。我々の理解力は自分自身のものであるべきだということは、ある程度まで認められている。しかし、我々の欲求と衝動も同じように我々自身のものでなければならないということ、あるいは我々自身の、しかも何らかの強さをそなえた衝動を持つことは、危険でも誘惑でもないということを、同じようにすすんで認める気持ちは見られない（CW18.263）。

我々の理解力が自分自身のものであるとは、知性を用いて習慣に従ったり習慣から逸脱したりするということである。これが、習慣に盲目的に従うことよりも善いということは、一般に認められている。しかし、理解力と同じように、欲求と衝動が自分自身のものであるべきだということは、一般には認められていない。ミルはこう述べている。したがって、欲求と衝動が自分自身のものであるということは、欲求と衝動から習慣に従ったり

習慣から逸脱したりするということ、つまり習慣に盲目的には従っているのではないということを必要とする。

以上から、個性を持つこと、すなわち欲求と衝動が自己の本性（現在の性格）の表現になっているということは、自己の真の欲求と衝動から、習慣に従ったり習慣から逸脱したりするということを意味しているといえるだろう。これが、ミルのいう「個性」の基本的な意味である。くわえて、個性の発達のためには、人間的な能力の発達や、良心との調和も必要だ、とミルは述べている。これらのことを、順に見ていこう。

まずは、人間的な能力の発達について。ミルは、先に見た『自由論』第 3 章第 5 段落で、「欲求と衝動が自分自身の育成によって発達させられ、変化させられてきた自分自身の本性の表現になっている人は、性格を持つといわれる」と述べている。このように、性格（個性）を持つ人は、自己の育成によって発達した本性をそなえていなければならない[2]。自己の本性を発達させるとは、具体的には何を意味しているのだろうか。それを知る手掛かりになるのは、『自由論』第 3 章第 14 段落の以下の一節である。

> ある人にとっては自らのいっそう高尚な本性の陶冶に役立つその同じものが、別の人にとっては、それを妨害するものになる。同じ一つの生き方が、ある人にとっては、自らのすべての行為の能力と享受の能力を最善の状態に保つ健全な刺激になるのに対して、別の人にとっては、自らのすべての内的な生を停止させたり粉砕したりする当惑すべき重荷になる（CW18.270）［強調は引用者］。

ミルは、高尚な本性を陶冶することを、行為の能力と享受の能力を最善の状態に保つことと言い換えている。それゆえ、自己の本性を陶冶することは、行為の能力と享受の能力を発達させることであろう。ところで、先に見たように、ミルのいう個性は、自己の本性の陶冶をその必要条件の一つとしている。したがって、ミルのいう個性は、人間的な能力の発達をその

必要条件の一つとしていると考えられる。

このことを示すさらなる論拠として挙げられるのは、『自由論』第 3 章第 8 段落および第 9 段落の以下の一節である。

> もし、人間が善なる存在者によって創られたものだと信じることが宗教の一部であると知れば、次のように信じることのほうがその信仰と整合している。すなわち、この存在者がすべての人間的な能力を与えたのは、それらが育成され発達させられるためであって、根こそぎにされ消し尽くされるためではない。そしてこの存在者は、自らの創造物がそこに具現された理想的な概念にいくらかでも近づくたびに、また彼らの理解の能力、行為の能力、享受の能力のいずれであれ、それがいくらかでも増すたびごとに喜ぶのだ、と。人間的な卓越の典型としては、カルヴァン派のそれとは異なるものがある。人間性は、たんにそれを断つこと以外の目的のために付与されているのだという、人間についての考え方がある。「異教的な自己主張」は、「キリスト教的な自己否定」と同じように、人間の価値を構成する要素である。自己発達（self-development）というギリシア的な理想があるのであって、プラトン的キリスト教的な克己の理想は、それと混じり合っているが、それに取って代わるものではない。……
>
> 人間が高貴で美しい観想の対象になるのは、自分自身のなかにある個性的なものをすりへらして一様にしてしまうことによってではなく、他人の権利と利害関心によって課された制限の範囲内でそれらを育成し引き出すことによってである（CW18.265-6）［強調は引用者］。

人間が善なる神によって創造されたと信じるならば、神が人間的な能力を与えたのは、それを発達させるためである。だから神は、人間が理解の能力、行為の能力、享受の能力を発達させることを喜ぶだろう。このような

考え方を、ミルは異教的な自己主張、自己発達というギリシア的な理想と呼んで、神の意志に自己を委ねる能力以外の能力を撲滅することをよしとするいわゆるカルヴァン派の考え方と対置している[3]。そして、自己発達は、理解の能力、行為の能力、享受の能力などの人間的な能力の発達をその必要条件としており、自己発達という理想は、人間のなかにある「個性的なもの」を育成することと言い換えられている。さらに、上に引用した一節のすぐ後では、人間のなかにある「個性的なもの」が「個性」と言い換えられている[4]。それゆえ、ミルの考えでは、個性の発達は、人間的な能力の発達をその必要条件の一つとしているといえる。

ミルのいう個性が人間的な能力の発達をその必要条件の一つとしていることを示すさらなる論拠として挙げられるのは、『自由論』第 3 章第 2 段落の一節である。

> ドイツ以外ではほとんどの人が、碩学としても政治家としてもほまれの高いヴィリヘルム・フォン・フンボルトが、ある論著の主旨とした次のような学説を理解することさえできない。すなわち、「人間の目的、つまり理性の永遠不変の命令によって規定されており、あいまいで一時的な欲求によって示唆されたのではない目的は、人間の力能を、完全で整合的な全体へと最高度に、もっとも調和的に発達させることである」。したがって、「あらゆる人間が絶えず努力を向けなければならず、また、とくに同胞に影響を与えようとする人々がつねに注意を払わなければならない」目的は、「力能と発達に関する個性である」（CW18.261）。

ミルは、人間の目的は、人間の力能を、完全で整合的な全体へと最高度に、もっとも調和的に発達させることであり、力能と発達に関する個性であるという、フンボルト（Wilhelm von Humboldt）の文章を肯定的に引用している。それゆえやはり、ミルのいう個性は、人間的な力能（すなわち能

力）の発達をその必要条件の一つとしていると考えられる[5]。つまり、人間的な能力の発達は、発達した個性のための必要条件であり、その意味で、発達した個性の付随的な構成要件になっている。

つぎに、良心との調和について。はじめに見たとおり、ミルの考えでは、欲求と衝動が自己の本性の表現になっていると、強い衝動（精力）が生じる。この点にかかわって、ミルは『自由論』第 3 章第 3 段落で次のように述べている。

> 行為への誘因が自分自身の感情と性格に合致しないようなものであれば、……それは自らの感情と性格を活発で精力的なものにするかわりに、不活発で無気力なものにするのに大いに役立つ（CW18.262）。

行為への誘因が自己の感情と性格に合致しないということは、それらが自己の本性の表現になっていないということであろう。ところで、欲求と衝動は、行為の誘因になりうると考えられる。それゆえ、行為への誘因が自己の感情と性格に合致していないということは、欲求と衝動が自己の本性の表現になっていないということを含意している。そして、行為への誘因が自己の感情と性格に合致していなければ、感情と性格が不活発で無気力なものになる。そこで、自己の本性の表現になっていない欲求や衝動を持つと、感情と性格が不活発で無気力なものになるといってもよいであろう。裏を返せば、自己の本性の表現になっている欲求や衝動を持つと、感情や性格は、活発で精力的なものになるであろう。「精力とは、強い衝動の別名にすぎない」（CW18.263）ので、そのような人は強い衝動を持つといえる。ところで、先に見たように、ミルのいう個性は、欲求と衝動が自己の本性の表現になっているということを意味している。それゆえ、個性を持つ人は活発で精力的であり、したがって強い衝動を持つと考えられる。

個性が強い衝動を生むことを示すさらなる論拠として挙げられるのは、先に見た『自由論』第 3 章第 5 節の一節（「欲求と衝動が自分自身のもの

である人、……」（CW18.264））の後半である。そこでミルは、精力的な性格を持つ人は強い衝動を持つと述べている。そして後続する文で、欲求と衝動に関する個性が発達することを奨励すべきでないと考える人は、社会は強い本性を必要としていないし精力の一般的な平均が高いことは望ましくない、と考えていなければならないと述べている。したがって、ミルのいう精力的な性格と発達した個性とは、同じものであると考えられる。それゆえ、発達した個性は、精力すなわち強い衝動をもたらすといえる。

さらに、強い欲求と衝動にかかわって、ミルは、『自由論』第 3 章第 5 段落で次のように述べている。

> ある人の欲求と感情が他の人の欲求と感情よりも強くて多様であるということは、その人のほうが人間本性のなまの素材をいっそう多く持っており、したがって、おそらくいっそう多くの悪をなすことができるが、確実にいっそう多くの善をなすことができるということにほかならない。強い衝動とは精力の別名にすぎない。精力は悪用されることもあるだろう。しかし、精力的な本性は、怠惰で無感覚な本性よりもつねに多くの善を生み出しうる（CW18.263）。

強くて多様な衝動を持つ人は、それらを持たない人よりも人間本性の素材をいっそう多く持つので、いっそう多くの善をもたらすことができる。しかし、強い衝動と欲求が悪用されると、多くの悪をもたらす恐れもある。衝動の持つこうした危険性について、ミルは、「自然論」第 42 段落で次のように述べている。

> 人間本性のあらゆる基本的な衝動が善い側面を持っており、十分な量の人為的な訓練を加えれば、有害ではなく有益になるかもしれないということが、たとえ真であったとしても、その改良は微々たるものである。したがって、いずれにせよ、あらゆる衝動は、たとえ

> 我々の生存にとって必要な衝動であったとしても、訓練なしには、世界を悲惨だらけにし、人間の生活を動物界で示される忌まわしい暴力と専制を誇張してまねたものにするにちがいない（人間に飼いならされ訓練を受けた動物の場合は別として）、と認めざるをえない（CW10.398）。

人間本性のあらゆる衝動は、十分な量の人為的な訓練を加えれば有益になるかもしれない。しかし、それらが訓練されなければ、世界を悲惨だらけにし、暴力と専制をもたらす。このように、ミルは、衝動には危険な側面があることを十分に認めている。そのうえで、ミルは、『自由論』第 3 章第 5 段落で次のように述べている。

> 欲求と衝動は、信念や自制心と同じように、完全な人間の一部分である。そして、強い衝動が危険なのは、それが適切なバランスを保っていないとき、つまり一組の目的と傾向が発達して強いものになっているのに、それと共存すべき他の一組が弱く不活発なままであるときだけである。人々が悪い行為を行うのは、欲求が強いからではなく、良心が弱いからである。強い衝動と弱い良心の間にはいかなる自然的なつながりもない。自然的なつながりはその逆である（CW18.263）［強調は引用者］。

個性すなわち性格を持つ人は、自分自身の欲求と衝動を持つ。これらの欲求と衝動が、信念、自制心、良心との間に適切なバランスを保って発達していかなければ、当人が悪い行為を行う危険が高まる、とミルは述べている。このように、ミルの考えでは、強い欲求や衝動は、それらの暴走を防ぐために、良心などと調和していなければならないとされる。それゆえ、ミルのいう個性は、欲求や衝動と、良心や自制心との調和を、その必要条件として（二次的な構成要件として）含んでいるといえる。

では、ミルのいう良心とは何か。この点にかかわって、ミルは、『功利主義論』第 3 章第 4 段落で次のように述べている。

> 義務の内的強制力は、義務の規準が何であろうと、まったく同じもの――心中の感情である。つまり、義務の違反に伴ういくらか激しい苦痛である。そして、その苦痛は、適切に陶冶された道徳的な性質を持つ人々にあっては、より重大な場合にわき起こり、義務の違反を不可能にするものとして避けさせる。この感情は、それが利害にかかわらない場合には、そして、純粋な義務の観念と結び付き、特定の形の義務や単なる付属的な事情と結び付かない場合には、「良心」の本質なのである。……［義務の観念の］拘束力は、一群の感情が存在することのうちにある。正の規準に背くためには、この感情を打ち破らなければならず、その規準にそれでも背くならば、後に呵責という形で、この感情におそらく出会うにちがいない。良心の本性や起源についていかなる理論を持つにせよ、この感情が良心を本質的に構成するものである（CW10.229）。

良心とは「義務の内的強制力」、つまり、ひとを義務へと内面から動機づけるものである。それは、心のなかの主観的な感情であり、厳密には、良心の呵責という道徳的な否認の感情である。したがって、この道徳感情は、義務であるという感情、すなわち義務感にほかならない[6]。

本節でこれまでに述べたことをまとめておく。個性を持つということは、欲求と衝動が自己の本性（現在の性格）の表現になっているということである。したがって、個性は、もっぱら欲求と衝動のあり方に現れている。このことが、個性に関するもっとも本質的な論点である。ただし、個性を持つためには、前提として、陶冶された高尚な本性を持たなければならず、したがって一定の人間的な能力がなければならない。くわえて、欲求と衝動が良心と釣り合っていなければならない。というのは、欲求と衝

動の独走を防ぐために、良心が必要だからである。一定の人間的な能力を持つこと、および欲求と衝動が良心と釣り合っていることは、個性に関する付随的な論点であるといえる。

第二節　従来の解釈について

以上の議論を踏まえ、従来の解釈を批判的に検討することにしたい。ミルの個性観をめぐる代表的な解釈としては、グレイ（John Gray）、ドナー（Wendy Donner）によるものがある[7]。

まず、グレイによれば、ミルのいう個性とは、個人が生まれつきそなえている自己の本質あるいは独特な本性であるとされる。自己の本質とは、自己に特有な潜在能力である。そして、個人は、多様な生活を観察したり自ら生活の実験を行ったりすることによって、運がよければ自己の本質を発見し、選択の幅が多少ある生活様式においてそれを実現することができる。ミルの個性観を、グレイはこう解釈している。

グレイが自らの解釈を支持する論拠として挙げているのは、『自由論』第 3 章第 4 段落の以下の一節である。

> 人間の本性は、ある模型にしたがって組み立てられ、あらかじめ指定された仕事を正確にするようにつくられている機械ではなく、むしろ樹木である。それは、自らを生命あるものとしている内的な諸力の持つ傾向に従って、自らをあらゆる方向へと成長させ発達させることを求めているのである（CW18.263）。

各人は、固有の傾向を持つ独特な本性をそなえている。こうした本性こそが、ミルのいう個性であるように見える。

グレイの解釈には、二つの問題点がある。第一に、グレイの解釈は、ミルのいう個性を個人に特有な本質、すなわち独特な潜在能力ととらえる

点で、ミル自身の考えと整合しない。というのは、先に見たように、ミルのいう個性とは、欲求と衝動として表現されているかぎりでの自己の本性であるからである。つまり、個性を持つということは、欲求と衝動が自己の本性を表現しているということにほかならないからである。

第二に、すでにライリィ（Jonathan Riley）が指摘しているように、ミルのいう個性は、個人に生まれつきそなわっているものではない[8]。それは、もっぱら、自己や環境などによって後天的につくられるものである。このことを示す論拠としてライリィが挙げているのは、『自由論』第 3 章第 18 段落の以下の一節である。

> さまざまな階級と個人をとりまいて、彼らの性格を形成する状況は、日をおってますます同化されてきている（CW.18.274）。

さまざまな性格を形成するのは、個人の本質ではなく、多様な環境である[9]。この叙述は、個人が生まれつき独特な本質をそなえているというグレイの解釈と整合しない。

くわえて、ライリィは、グレイに対する上述の批判を補強する二つの付随的な論拠を挙げている。第一のものは、『論理学体系』第 3 巻第 22 章第 6 節の以下の一節である。

> たとえば同一の種類の動物や、年齢、性、居住する地域が同じである人間でも、顔や姿かたちがまったく異なっているだろう。だが有機体は、（これを支配している法則の極端な複雑さから）他のいかなる現象よりも著しく変化しうるので、すなわちいっそう多くのまたいっそう多様な原因によって影響されやすいので、またそれ自身一つの始めを持ち、したがって一つの原因を持つので、有機体のどの特性も究極的ではなく、そのすべてが派生的なもので、かつ因果関係によって生じたと信じるべき理由がある。この仮定は、個体ごと

> に異なる特性がまた、同じ個体においてときに応じて一般に多少とも変化するという事実によって確証される。この変化は、他の出来事と同じように原因を前提としており、したがってその特性が因果関係から独立ではないということを含意している（CW7.585）。

この引用に先立って、ミルは、事物の究極的特性と派生的特性を区別している。究極的特性とはいかなる原因も割り当てることができないものであり、派生的特性とは原因に依存しているものである。たとえば、気体であるという酸素ガスの特性は、酸素が一定量の熱エネルギーを持つという原因に依存する派生的特性である。というのは、酸素ガスから熱エネルギーを除去していけば液体になり、気体という特性は失われるからである。他方、物体間の引力、物体を構成する微粒子の極性、原子量などは、さらなる原因に依存しない究極的特性であるとされる。ところで、動物や人間のような生物が持つ特性は、どれも派生的なものである。つまり、個々の人間が持つさまざまな特性は、外的な原因に依存しているので、その原因が変化するのに応じて変化する。ミルはこう述べている。この一節は、個人が生まれつき独特な本質をそなえているという考え方を、ミルが採用していないことを示している、とライリィは論じている。

個人が生まれつき独特な本質をそなえているというグレイの解釈に反対する、第二の付随的な論拠としてライリィが挙げているのは、『経済学原理』第 2 巻第 9 章第 3 節の以下の一節である。

> 世の大先生たちが、アイルランドの産業が停滞しており、アイルランドの民衆が自らの生活を改善しようとする精力を欠いていることを説明するのに、ケルト族に特有な怠惰と無頓着をもってしているのは、人間の本性や生活におけるもっとも重大な問題に関する見解を形成する方法についての、痛烈な風刺ではないだろうか。さまざまな社会的道徳的な影響が人間の精神に及ぼす効果に対して考察を

> 払うことを回避する、あらゆる卑俗なやり方のうちでもっとも卑俗なものは、人間の行為や性格の多様性を生まれつきの自然的な差異に帰す方法である。いったい、ある種族にとって周囲の事物が将来に対する配慮や努力から何の利益も引き出せないように配置されている場合に、なお怠惰にも無頓着にもならない種族があるだろうか（CW2.319）。

アイルランドの産業が停滞しアイルランド人が生活を改善する意欲を欠いている原因がケルト族の怠惰で無頓着な性格にあるという考え方を、ミルは批判している。この考察に基づいて、ミルは、人間の行為や性格を決定する生まれつきの自然的な差異があるという考え方を批判している。この批判は、差し当たり、特定の民族に生まれつき特有の本性があるという考え方を否定するものである。しかし彼は、より一般的に、人間の行為や性格の多様性を生まれつきの自然的な差異に帰す方法を批判してもいる。それゆえ、ミルは、個人が生まれつき独特な本質をそなえているという考え方を、採用していないと考えられる。

ライリィがグレイの解釈を批判するために挙げている、先に見た二つの付随的な論拠は、個性が前提している人間の本性が生まれつきのものではないとミルが考えていることを示すことによって、個性が生まれつきのものではないとミルが考えていることを示すものである。この意味で、これらの論拠は、間接的・付随的なものといえる。

以上から、グレイの解釈は、個性が個人に特有な本質（潜在能力）であるとする点、および、個性が生まれつき個人にそなわっているとする点で、ミル自身の考えと整合しないといわざるをえない。それゆえ、グレイの解釈を擁護することは困難であろう。

つぎにドナーは、ミルのいう個性について次のように論じている。個人が固定的な本質を持つ、とミルは考えない。しかし、個人は、生まれつきの気質や幼年期の環境に応じて、人間的な能力の自己に特有な組合せあ

るいは範囲を持つ。そして、個人は、自己に特有な能力の組合せを発見し、この組合せを基盤として生き方、人生計画、職業生活、性格特性などを創造する。この創造は、自己に特有な能力の組合せを育成しある程度つくり変えることでもある。それゆえ、個人は、自己に特有な能力の組合せを部分的には発見し、部分的には創造するといえる。こうして発見され創造された、自己に特有な能力の組合せが、ミルのいう個性なのである[10]。

ドナーが自らの解釈を支持する論拠として挙げているのは、先に見た『自由論』第 3 章第 5 段落の一節である。「欲求と衝動が自分自身のものである人、欲求と衝動が、自分自身の育成によって発達させられ、変化させられてきた自分自身の本性の表現になっている人は、性格を持つといわれる」（CW.18.264）。個人は、自己の本性を発見する。この本性は、自己の育成によって発達させられたものであるといわれているので、その人に特有な能力の組合せであると考えられる。そして、発達した自己の本性、すなわち発達した、個人に特有な一組の能力が、その人の性格すなわち個性にほかならない。こう解釈すれば、上に引用した一節は、ドナーの解釈を支持する論拠になるように見える。

ドナーの解釈には、先に見たグレイの解釈と同じような二つの問題点がある。第一に、ドナーの解釈は、ミルのいう個性を自己に特有な能力（自己が生まれつきそなえている潜在能力）の組合せであるとする点で、ミル自身の考えと整合しない。というのは、先に見たように、自己の本性には、欲求や衝動として表現されるものと、そうでないもの（自己が生まれつきそなえている潜在能力など）があるが、ミルのいう個性とは、後者ではなく前者であるからである。第二に、ドナーの解釈によれば、個性は、部分的には自己によって創造されるものであるとはいえ、部分的には生まれつきのものである。しかし、個人が個性を生まれつきそなえているという考え方をミルに帰すことは、すでにライリィが指摘したように、ミル自身の考えと整合しない。以上から、ドナーの解釈を支持することは困難だろう。

グレイとドナーは、ミルのいう個性を、潜在的な能力ととらえている。この解釈には無理がある。くわえて、グレイとドナーは、欲求と衝動の個性をほとんど論じていない。ここに、大きな問題点がある。

おわりに

個性を持つということは、欲求と衝動が自己の本性（現在の性格）の表現になっているということである。つまり、個性はもっぱら欲求と衝動のあり方に現れている。（このことが、ミルのいう個性にとって、もっとも本質的な構成要件である）。ただし、個性を持つためには、前提として、一定の人間的な能力がなければならない。そして、欲求と衝動が良心と釣り合っていなければならない。というのは、欲求と衝動の独走を防ぐために、良心が必要だからである。一定の人間的な能力を持つこと、および欲求と衝動が良心と釣り合っていることは、個性の付随的な構成要件であるといえる。

以上の議論を踏まえ、ミルのいう個性とは自己の本質すなわち自己に特有な潜在能力であるというグレイの解釈、および、ミルのいう個性とは、部分的には発見され部分的には創造される、自己に特有な一組の能力であるというドナーの解釈は、どちらも、個性を潜在的な能力ととらえる点、および、欲求と衝動の個性をほとんど論じていない点で、ミル自身の叙述と整合しないことを明らかにした。

（みずの・としなり　慶應義塾大学非常勤講師）

【付記】本稿は、日本ピューリタニズム学会 2012 年 9 月定例研究会で発表した原稿に加筆訂正を施したものである。

＊　ミルの著作からの引用はすべて、*Collected Works of John Stuart Mill*, 33 Vols., Robson, J.M. general ed., Toronto and London: Toronto University Press and Routledge, 1965-91 から行う。本文中の引用は、略号 CW、巻数、頁数の順に記す。なお訳出に際しては、以下の文献を適宜参照した。杉原四郎、山下重一編『J・S・ミル初期著作集』1-4、御茶ノ水書房、1979-97 年、伊原吉之助訳「功利主義論」、関嘉彦編『ベンサム　J・S・ミル』、中央公論社、1979 年、早坂忠訳「自由論」、関嘉彦編『ベンサム　J・S・ミル』、中央公論社、1979 年、川名雄一郎、山本圭一郎訳『J・S・ミル　功利主義論集』、京都大学出版会、2010 年。

1　Cf. Himmelfarb, G., *On Liberty and Liberalism: The Case of John Stuart Mill*, Knopf, 1974, p.59, Garforth, F.W., *Educative Democracy: John Stuart Mill on Education in Society*, Oxford University Press, 1980, p.78, Berger, F., *Happiness, Justice, and Freedom*, University of California Press, 1984, p.233.

2　この点にかかわって、ミルは、『自由論』第 3 章第 10 段落で次のように述べている。「個性が発達と同じ事柄であり、個性の育成のみが十分に発達した人間を生む、あるいは生むことができる、ということを述べ終わったのであるから、……」（CW10.267）。このように、個性は、ひとが生まれつきそなえているものではなく、自己の育成によって作り出されるものなのである。

3　カルヴァン派に対するミルのこの解釈については、異論の余地がある。

4　先の引用のすぐ後で、ミルは次のように述べている。「各人は、その個性の発達に応じて、自分自身にとっていっそう価値があるものになり、したがって他人にとっていっそう価値があるものになることができる」（CW10.266）。この一文における「個性」は、先の引用における「個性的なもの」に対応している。

5　この点にかかわって、ミルは、『自由論』第 3 章第 15 段落で次のように述べている。「現代の世論の方向にはある特徴があるが、それは、世論を個性の顕著な表出に対して不寛容にするのに、とくに適したものである。一般的、平均的な人間は、知性の点でふつう並みであるだけでなく、……」（CW18.271）。個性的でない人は、発達した知性を持たない。裏を返せば、個性的な人は、発達した知性を持つ。つまり、個性は、発達した知性を含んでいると考えられる。

6　柘植尚則『良心の興亡――近代イギリス道徳哲学研究』、ナカニシヤ出版、2003 年、186-7 頁、参照。ミルにおいて、良心は義務感に引き下げられた、あるいは、義務感に取って代わられた、と柘植尚則は述べている（柘植 2003 年、196 頁、参照）。

7　これ以外の代表的な解釈としてバーガー（Fred Berger）、ハンバーガー（Joseph Hamburger）によるものがある。まず、バーガーは、自己発達を遂げた人（す

なわち個性を発達させた人）について、次のように述べている。第一に、そのような人の欲求と衝動は、自分自身の本性の表現になっており、社会の圧力によってのみ獲得されたものではない。第二に、そのような人の性格の発達の仕方は、概ね自らの反省・判断・知識・個人的な経験・選択の結果である。第三に、そのような人の独特な能力あるいは潜在能力は、発達しているか、少なくとも使用されている。第 4 に、そのような人は、社会の圧力に抵抗するために、性格の強さを持つ必要がある。第 5 に、そのような人は、自律的な人生を送っており、自らの個性を表現する生き方を能動的に営んでいる（Berger, *op.cit*., p.238）。

また、ハンバーガーは、個性を、道徳の改革の指導者にとって必要な資質であるとしたうえで、個性（を持つ人）の積極的な側面と消極的な側面を分けている。そして、その消極的な側面として、習慣の支配に抵抗するということを挙げている。つぎに、その積極的な側面として、新しい観念や実践を探求する独創性、自らのあらゆる能力の使用、生活の実験を行うさいに推論に基づく選択を行うこと、強い欲求と衝動を持つこと、大きな精力を持つこと、道徳的な勇気を持つこと、確固たる目的を持つこと、熟慮のうえで行った決断を維持する不動性と自己統制を示すことなどを挙げている（Hamburger, J., *John Stuart Mill on Liberty and Control*, Princeton University Press, 1999, p.152-3）。

これらの解釈は、ミルの個性のいくつかの構成要件を羅列したものにすぎず、欲求と衝動が自己の本性（現在の性格）の表現になっているということが、ミルのいう個性の本質的な構成要件であるという点をとらえ損なっている。

8　Cf. Riley, J., *Mill on Liberty*, Routledge, 1998, p.170-2. 泉谷周三郎「J.S.ミルにおける自由原理と個性」、『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅲ（社会科学）』4、2001 年、14-6 頁、参照。

9　ただし、ミルは、個人の性格が環境によって決定されるとは決して考えていない。ミルは、個人の性格が環境によって決定されるとするオウエン（Robert Owen）に強く反対し、個人こそ自らの性格と環境を改善することができると主張している（大久保正健「J.S.ミルの教育思想――初期思想における哲学的基礎」杉原四郎、山下重一、小泉仰責任編集『J.S.ミル研究』、御茶ノ水書房、1992 年、142-3 頁、参照）。

10　Cf. Donner, W., *The Liberal Self: John Struart Mill's Moral Philosophy*, Cornell University Press, 1991, p.120-2.